

ヒアリング結果

【事務局で実施したもの】

(追加分)

意見聴取した方

青野 由利 毎日新聞社 科学環境部編集委員
米本 昌平 三菱化学生命科学研究所 社会生命科学研究室長
(科学史、比較政策学、生命倫理)

青野由利氏ヒアリングメモ

【氏名】青野 由利

【所属】毎日新聞社 科学環境部編集委員

【主な意見】

- ・これまで、科学技術会議のクローン小委やヒト胚小委では、クローン人間やES細胞に関する個別の議論しか行われず、ヒト胚全体の議論を先送りしてきた。胚に関し問題が発生する度に個別の議論するだけではなく、胚はどのように取り扱うべきかの根本の議論をして欲しい。
- ・また、胚だけでなく配偶子まで含めて、基本的、根元的なところを考えておくべき。これから配偶子を用いた新しい技術が出て来ることが予想され、それらの技術にどう対応するかのよりどころを構築しておくことが必要。
- ・専門調査会で人クローン胚の研究利用を中心に議論するべきという意見もあったが、これまでの流れを考えるともっと幅広く議論するべきで、賛成できない。
- ・厚生労働省では、第三者提供の精子・卵子・胚に限定した生殖補助医療について議論している。同じヒト胚にかかわる問題なのに、総合科学技術会議と別々に議論している印象があるが、両者を統合した視点が必要ではないか。また、通常の体外受精などの生殖補助医療がどうあるべきかという議論がこれまで抜け落ちている。それも議論するべきではないか。
- ・議論の場に、受精胚を提供することになる患者さんや、実際に医療で恩恵を受ける立場の人が入っていないのはまずいのではないか。
- ・人クローン胚の作成には未受精卵が必要となるが、研究を行いたいと考えている人達は誰から未受精卵の提供を受け気なのか。あたかもどこかに卵子が材料として存在しているかのように考えている感じがして違和感をおぼえる。
- ・また、卵子の提供という観点からは、生殖補助医療における卵子提供と同じはずだが、厚労省が行っている議論とリンクしていないのは問題だと思う。
- ・ヒト胚の議論をするのであれば、凍結胚がどのくらい存在するか、どれくらい研究利用されているかなど、ヒト胚の取扱いの現状をきちんと調査するべ

き。実状がわからないまま議論はできない。

- ・ 胚の問題については、脳死と違って専門的で目に見えないこともあり、一般の方がセンシティブに考えていたとは思えない。考えるきっかけも少なかったと思う。しかし、再生医療などを通じ国民全体に関わってくる問題なので、もっと国民が議論に参加する仕組みが必要ではないか。

米本昌平氏 ヒアリングメモ

【氏 名】米本 昌平

【所 属】三菱化学生命科学研究所 社会生命科学研究室長

【専 門】科学史、比較政策学、生命倫理

【主な意見】

- ・ヒト受精胚の取り扱いの問題は未だかつて我々が直面していなかった問題であり、まずどのような問題であるかという全体像を示すことが重要。
- ・そのためには、この問題を良く分かっている人によって包括的な調査報告を作成してもらうことが必要。この包括的な調査報告は、単なる論点整理ではなくて、外国がこれまでやってきた検討などの根拠データもきちんと示したものとすべき。このような包括報告を国が作るよりは、国以外の研究機関や調査機関が作るべきだと思う。欧米ではそのような調査機関がしっかりしており、様々な政策提言の中から国が政策を選択している。
- ・宗教の観点や日本文化の観点などを含め、様々な人からヒアリングすることも重要であるが、この問題について分かっている人でないと的確な意見が出てこないのではないかと。しかし、そういう人はなかなかいない。
- ・そのような意味で、国民アンケートという手法には懐疑的。良く分かっていない人たちが、良く分からないまま意見を述べて、しかもそれが何割の人はこう考えているという数値で出てくるためミス・リーディングになりやすい。しかし、そういうこともやらないといけないと思うが。
- ・キリスト教は人の発生について、積極的に検討し見解を示しているが、それは人の発生プロセスが教義の核心に関わっているからであり、世界的に見てもこれは特異的な存在。
- ・キリスト教がこの問題について結論を出したのは、体外受精が現実化した最近のこと（1997年バチカンアカデミーが「受精の瞬間が将来個体になるべき新しい生命体の体制を特徴づける」と発表）であり、それより以前は受胎が人の始まりとしていた。
- ・当然のことながら、我が国の宗教界ではヒト受精胚についてまだ深く考えられていない。日本では大本教が同様の見解を示しているが、キリスト教の見

解に刺激され、共鳴したものとみえる。

- ・これまでの我が国のヒト胚に対する問題設定や議論の在り方はアメリカのコピーと言ってよく、もっと他の国（ヨーロッパ諸国）の対応も十分視野に入れて問題設定をする必要がある。
- ・倫理はある意味で意識・感情の表れであり、我が国の国民のヒト受精胚に対する意識・感情を明らかにするような作業が必要ではないか。例えば、日本人の行動パターンを分析しそこにある無意識な感情や心理を解き明かすような研究が有効ではないか。
- ・我々も、そのような観点から韓国や台湾の生命倫理の議論を調査して日本人の感情と共通する点の解析を試みてみたい。